

「トンドの謀議」をめぐる一考察

—— スペイン領フィリピン成立の断章 ——

菅 谷 成 子

はじめに

スペインのフィリピン植民地支配は、後に初代総督となるミゲル・ロベス・デ・レガスピ（1510-72年）の率いる遠征隊が1565年5月にフィリピン諸島中部ビサヤ地方の中心、セブ島セブに根拠地を築いた時に始まる。レガスピはその前年11月にヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）のナビダド港から太平洋横断航海に出発した。遠征隊は、フィリピン諸島のサマル島、ボホル島を経由して4月27日にセブ島セブに到着し、レガスピは翌月セブの首長トゥパスと和を結び根拠地を築いた。その一方、孫のフェリペ・サルセドは、アウグスティヌス会士で卓抜した航海者であったアンドレス・デ・ウルダネタを助言者にして、太平洋横断帰路の発見に向かった。一行の太平洋横断帰路の発見は、フィリピン諸島がメキシコ経由でスペイン本国と結びつくことを可能にし、これが以後300年以上にわたるスペインのフィリピン諸島支配の前提となった。

その後、レガスピは、ポルトガル人の妨害、現地住民との軋轢などから根拠地を北西に位置するパナイ島に移した。しかし、レガスピは、さらにより有利な根拠地を求めて北上してルソン島のマニラに至り、土地のイスラーム化した首長を退けて1571年6月にスペイン植民都市「マニラ市」を建設した。これがスペインの恒久的な植民地首府となった¹⁾。

この当時、フィリピン諸島には、おおむね「バラングイ」と総称される親族

組織を基礎とする社会集団を越えて一定の地域を一元的に統治するような政治勢力は存在しなかった。例えば、スペインのマニラ遠征にはビサヤ地方の諸島住民が協力した。またマニラに根拠地を築くとレガスピは、直ちに少人数からなる遠征隊をルソン島沿岸低地部を中心に派遣した。これらの遠征にも諸島住民が加わり、スペインは、各地の首長に対して個別に武力を行使あるいは誇示するなどしつつ、スペインの権威を認めさせ貢納を要求し、その支配領域を拡大したのである。この間、マニラは、太平洋横断航路を利用したメキシコのアカプルコとの間のマニラ・ガレオン貿易の成立によって中国・福建からの中国帆船貿易と有機的に結ばれ、新大陸の銀と中国の生糸・絹織物、陶磁器などが集散するスペインの植民地首府として急速に発展し²⁾、17世紀初頭までには、スペイン領フィリピン諸島の外縁が形成されることになった。

本稿では、マニラ・ガレオン貿易の隆盛により、東南アジアにおけるヨーロッパの拠点、スペイン領フィリピンの植民地首府として、マニラが急速に確立される過程で、1588年に発覚した「トンドの謀議 (Tondo Conspiracy)」と称される、マニラ (トンド) および周辺首長によるスペインに対する大掛かりな蜂起計画に着目し、その背景とそれがスペインのフィリピン統治に及ぼした影響について検討する。それにより、スペイン領フィリピンの成立という歴史過程に「トンドの謀議」を改めて位置づけてみたい。

「トンドの謀議」の概要は、下記のようなものである。

スペイン来航当時のトンドの首長ラカンドゥーラ³⁾の息子であったマガット・サラマットは、スペインの支配下におかれて伝統的権威や特権を失墜した首長層の不満を背景にして1587年にアグスティン・デ・レガスピ、マルティン・パガ、フェリーペ・サラリラらとスペイン人の駆逐計画を主導した。駆逐計画では、日本人のファン・ガヨに武器の将来を要請する一方、親族の繋がり軸にして、マニラ周辺の諸地域およびパンパンガ地方の首長の賛同を得た。

さらにスルー王国や姻戚関係にあったブルネイ王国のスルタンの協力を得るために、マガット・サラマットは、アグスティン・マスギット (サラリラの息子) やファン・バナルと使者にたつたが、密告によって88年11月にカラミア

ン諸島でスペイン官憲によって捕縛された。彼らは、マニラで裁判にかけられ有罪とされ、財産を剥奪された上、アグスティン・デ・レガスピ、パガ、サラリラ、日本人通訳ディオニシオ・フェルナンデスらとともに死刑に処された。また駆逐計画に加わった他の者も流刑となった。ファン・ガヨは約束に従って武器を船載してマニラに来航したが、計画が露見した後であった。

1. スペイン人来航時のフィリピン諸島

スペイン来航時のフィリピン諸島では、人々は一般に「バラングイ」と総称しうる親族集団を核とする共同体を基礎に、主として海岸や川筋沿いに集落を形成していた。これらのバラングイは、周辺各地域との交易活動はあったが、自給自足を基本とする社会であった。また、それぞれのバラングイを率いるダトと呼ばれた首長の間に一定の優劣関係が存在し、必要に応じて、援助・協力、同盟関係を取り結ぶなど、バラングイとバラングイを繋ぐネットワークは存在していたが、例えば、一つの川筋を越えて異なる地域を統合して支配するような政治勢力は、一般には存在しなかった。

その一方、ブルネイ王国やマルク（モルッカ）諸島のテルナテ王国などの隣接諸地域のイスラーム勢力の影響もフィリピン諸島に及んでいた。レガスピが築いたセブの根拠地の周辺にもイスラーム商人が訪れており、フィリピン諸島南部のスルー諸島やルソン島のマニラには、16世紀前葉にはイスラームを受容した王国ないしは政治・社会組織が存在した。また、ミンダナオ島プラギ河流域でも16世紀中葉までにはイスラームが組織的に受容され、17世紀のマギンダナオ王国の成立に繋がった⁴⁾。これらの地域では、イスラームが「バラングイ」を越える政治・社会的統合の原理として一定の機能を果たすことになった（早瀬、25-26、36-48、67-70頁）。

ルソン島周辺についてみると、ブルネイ王国は交易活動を通じて南西岸のバタンガス地方、ルバン島、ミンドロ島、クヨ島などを影響下においていた。なかでもスペイン人来航時のマニラは、ブルネイと密接な関係のある交易拠点と

して繁栄しており、その王族と姻戚関係をもつイスラーム化した首長が率いる6,000人規模の集落が存在していた (Scott, 1994, pp. 191–193)。当時のブルネイ王国は、さらに婚姻関係を通じてスルー王国とも関係があり、スルタン・シャイフル・リジャル (Saiful Rijal; 在位1533–81年) の下で、この海域で強い勢力を保っており、ブルネイ、マニラ、スルーにはある一定の政治的ネットワークがみられたといえる。そのため、スペインがマニラを拠点にしてフィリピン諸島の植民地化を進めるにあたっては、その勢力を排除する必要があった (Blair and Robertson [以下BRと略記する] 4: 152–172; Scott, 1994, pp. 191–192; 早瀬、18頁)。

1570年5月にレガスピの命を受けた陸軍司令官／軍団司令官 (maestre de campo) マルティン・デ・ゴイティ率いる偵察船隊 (ビサヤ地方の諸島住民を含む) が初めてマニラに到達した当時、イスラーム化した3人の有力な首長が存在した。これらの首長は互いに親族関係にあり、大砲を配置して居住地の守りを固めており、ブルネイの影響下で、「バランガイ」を越える一定の政治的な統合力をもって、周辺諸地域に影響を及ぼしていた。

その当時の「マイニラ (マニラ)」には、ブルネイ王国の前進基地、交易拠点の一つとして、周辺諸地域からの商人がさまざまな品物を舶載してきた。マニラの商人は、例えば、ブルネイ船の舶載した刃物、刀剣類、樟脳、香水、サゴ製品、ジャワ製バティック (臙纈染布)、インド製綿布 (チンツ)、宝石類を諸島各地にもたらしたが、その対価として金やその他の特産品などを入手しており、ルソン島からセブヤパナイを含むビサヤ地方にいたる交易において中心的役割を果たしていた (Scott, 1994, p. 208)。これが、レガスピがスペイン根拠地をパナイ島からマニラに移した理由でもあった。

現在のマニラ市のイントラムロス地区、すなわち、パシグ河左岸の河口付近は「マイニラ」と呼ばれていたが、その地を支配していたのがアチェ (ラジャ・マタンダ)、そして、その甥で後継者に指名されていたラジャ・ムダ、すなわち、スライマン (ソリマン) であった。アチェは、その母がブルネイ王国のスルタンの娘であり、さらに1521年7月にマゼラン没後の世界周航途上の

遠征隊とブルネイで遭遇し、その捕虜となった経験があった。当時、アチェは、ブルネイ王の下で海上活動の指揮をとり、また自身の婚姻のためにブルネイに滞在していたのである (Majul, p. 73)。マゼラン隊に同行して遠征記録を残したアントニオ・ピガフェッタは、アチェを「ルソン島の王の息子」としている (ピガフェッタ、592頁)。甥のスライマンもまたその妻をブルネイから迎えていた。

一方、「マイニラ」の対岸、パシグ河右岸のトンド地区は、アチェのいところにあたるラカンドゥーラが治める地であった。ラカンドゥーラは、独占的な先買権を握って中国・福建との交易を管轄し、他の諸島住民に中国商品を転売して利益を上げていた。さらにラカンドゥーラは、福建から年に2-3隻訪れる交易船から繋船税を徴収するとともに、これらの交易船の継続的な来航を促すため、商品価額の半額のみを支払って残額を翌年支払うなどしていた (Scott, 1982, pp. 262-263; Santiago, “Houses,” pp. 44-45)。またバイバイ (現サン・ニコラス地区付近) には、中国人のために居留地が設けられていた。中国船は、陶磁器、土器、絹・木綿織物、ビーズ、錫、真鍮製品、鉄製品、鋳物、日常雑貨などの商品をもたらした。なかでも、鉄製品、鋳物は、鍛冶の原料として、特にビサヤ諸島で需要された。現地の商人がこれらの商品を諸島各地に運ぶ一方、金や棉花、蜜蠟、シナモン、鹿皮、水牛の角、蘇木などがマニラに集められて福建を初めとして、周辺諸地域に輸出された (Scott, 1994, pp. 75-76, 191-194, 207-208)。約1世紀後、ラカンドゥーラの曾孫にあたるファン・マカパガルは、スペイン当局に対して曾祖父ドン・カルロス・ラカンドーラ⁵⁾ について、トンドおよびその周辺のバランガイを支配した首長で、その勢威はブラカンにまで及んでいたと証言した (Scott, 1982, pp. 262-263; Santiago, “Houses,” pp. 44-45; Manuel, pp. 239-243)。

2. スペイン支配の深化と首長

1570年5月にマニラに遠征したさい、デ・ゴイティは「マイニラ」の首長ア

チェと会合し、またスライマンはデ・ゴイティと血盟を結んだ。しかし、両者に小競り合いが発生し、スライマンは「マイニラ」を焼き払って退却した (Noon, pp. 393-398)。翌71年4月にレガスピは、デ・ゴイティの報告により根拠地をマニラに移すべく北上した。マニラ湾に姿を現したスペイン船隊に対して、前年の経験によりスライマンは拒否的であったが、アチェおよびラカンドゥーラは受容的であった。レガスピは武力の行使を押さえて、ラカンドゥーラを初めとする有力首長と和を結ぼうとしたが、結局、レガスピの上陸にあたって、「マイニラ」は再び焼き払われ、人々は対岸のトンドに避難した。スライマンは抵抗したが、レガスピは「マイニラ」を奪取し、最終的に5月19日にスライマン、アチェおよびラカンドゥーラと講和した⁶⁾。その骨子において特に重要な点は、スペイン人が「マイニラ」の砦の跡地に居住地を建設することを認め、その居住地の家屋建設に協力するということであった (Noon, pp. 405-410)。レガスピは、6月24日にスペインの都市自治体、植民都市「マニラ市」を設置し、これがスペイン支配の恒久的な根拠地となった (Cushner and Tubangui, pp. 3-4, 14-17)。

しかし、マニラの北方の穀倉地帯パンパンガ地方マカベベの首長は、「マイニラ」の首長らがスペインに降ったことに納得せず、40隻2,000人の船隊を率いてトンドのラカンドゥーラの下に馳せつけた⁷⁾。ラカンドゥーラ自身はマカベベの首長によるスペイン攻撃には参加しなかったが、情報を提供するなどして支援し、息子や甥がスペイン攻撃に参加するのを妨げなかった。結局、マカベベの首長はトンド地区のバンクサイ湾の戦いで戦死し、スペインに対する抵抗は潰えたが、逆にレガスピは、穀倉地帯のパンパンガを征服すべくデ・ゴイティ率いる遠征隊を差し向け、その案内にスライマンやラカンドゥーラは駆り出される結果となった (Noon, pp. 408-410)。

この間、「マイニラ」からの撤退を余儀なくされたスライマンやラカンドゥーラの子孫の多くは、北方に隣接するブラカン地方各地、すなわちブラカン、キングア (Quingua)、ポーロ (Polo)、カルムピット (Calumpit) などに移動した。また、スペインの居留地の南には、バグンバヤン (現リサル公

園付近)が形成され、またエルミタやマラテ地区などにも人々が移り住んだ (Medina, pp. 58-60)。

スペインの植民地統治が進展するに従って、支配下におかれた住民にとって重要な意味をもつことになった行政単位はプエブロであり、スペイン支配の正統性原理を支えた教区教会がおかれるカトリシズム伝道の拠点ともなった。プエブロは先スペイン期のバランガイを再編した大小いくつかの点在する集落、すなわちバランガイ、ピシタ、シテリオなどで構成されていた (Sánchez Gómez, pp. 158-166)。その後「バランガイ」は貢税納入グループを指すようになったため、19世紀までには、「バランガイ」に代わって「バリオ」が使用されるようになった。

プエブロを統治したのは、プエブロの長 (町長; *gobernador*) で、当初は、プエブロの既婚の男子住民による毎年の選挙で選出されることになっていたが (モルガ、371-372頁)、17世紀中葉までには選挙権は有力者のみとなった。町長は、プエブロ単位で課された貢税や労役、強制売り渡し (特定の物品を定められた量と価格で供出すること) の徴収・徴発などを請負い、それらを各州に貢納する義務をとおして、スペイン権力と住民の仲介役としての役割を果たした。実際の徴税業務に責任をもったのは各バランガイの長 (*cabeza de barangay*) で、その配下の住民から貢税を徴収し、労役を徴発するなどした。

これらの役職は、実際的には、まず先スペイン期のバランガイを率いたダトらの首長層に委ねられた。スペイン総督府は、彼らを一般にプリンシバル (有力者) と呼び、プリンシパリーアと総称した。その後、プエブロの統治機構が整備されるにつれて、プリンシパリーアは役職者のなかでも、現職の町長とバランガイの長、助役、およびその経験者となった。町長やバランガイの長は、助役、治安官、書記などに補助され、町長以下の役職者は植民地官吏として地方行政機構の末端を占めた (Sánchez Gómez, pp. 199-206)。プリンシパリーアは、貢税や労役などを免除され、さらに貢税の徴収過程で富裕化する機会があった。その結果、プリンシパリーアに連なる人々は次第にプエブロの有力者として特権階層を形成し、一般のプエブロの住民を政治・経済的に支配するよ

うになった。

一方、植民地官僚による地方行政機構が整備されるに従って、スペイン領フィリピンの実情に応じた司法の執行が求められることになった。1583年にマニラの司法行政院（アウディエンシア）がメキシコの司法行政院から独立して、総督の諮問機関かつ控訴審として設置された（Licuanan and Llavador, 4: 57-58；その後、90年に廃止され、98年に再設置された）。

その司法行政院の検察官（fiscal）であったガスパール・デ・アヤラの1585年6月20日づけの報告によれば、パンパンガでは同年4月初めに在地の首長層2名による反乱があった。彼らは、いずれも洗礼名をもち、ドン（don）とも称される在地の有力者であった。ファン・デ・マニラおよびニコラス・マナギット（Nicolas Managuete）は100名の地元民を率い、50丁の火縄銃や火薬、その他の武器を携えて隣接するカンダバに入った。ファン・デ・マニラは、有力親族により蜂起を思いとどまるよう説得されたが、その者を殺害してその黄金を奪った。その後、反乱軍は船で川を下りマニラに向かい、途中で遭遇した40名の地元民を殺害して掠奪したが、スペインの派遣した30名からなる討伐隊により森林地帯に退却した。スペインの追討軍に対してマナギットは、身の安全が保障され罪に問われないのであれば投降するとし、その保証のため、マナギットの聴罪司祭を派遣するように要請した。その結果、マナギットはアウグティヌス会の修道院に手勢とともに降った。一方、ファン・デ・マニラも他の有力者や手勢とともに退却したが、スペインは、ファンが次の攻撃を企図しているとして、謀略によってファンを誘き出して敗走するところを殲滅した（Licuanan and Llavador, 4: 253-254）。

ファン・デ・マニラは、実は、1585年の蜂起前に司法行政院の長官を兼務するサンティアゴ・デ・ベラ総督（在任1584-90年）に対して、スペイン人の不正を具体的に糾弾し正義が行われるよう嘆願し、是正されないのであれば蜂起するしかないと訴えていた（Licuanan and Llavador, 4: 243-244）。ファン・デ・マニラは、自らスペインの権威を受け入れ、カトリシズムを受容したのであろう。彼の来歴は不明であるが、「マニラのファン」と読めるため、スペインの

マニラ占領によってパンパンガに居を移した有力者の一人であったのかもしれない。しかし、スペイン支配の深化により、従来の社会秩序が崩壊する渦中であって、自らの権威が侵食されるとともに、スペインによる住民収奪や不正を実感した一人であったと思われる。

すなわち、スペイン支配の下で、マニラ周辺の首長層は、住民統治の仲介者として温存され、貢税の支払いや労役を免ぜられることになったが、これまでの威信や特権を剥奪され、被奪感を味わった。例えば、これまで配下の住民から徴収していた貢納や関税等はスペインに差し出されることになったが、トンドなどのマニラ市周辺地区においては、住民の約3分の1が逃散したため、それらの地区の首長層は、それらの住民にかかる税をも代わって負担しなければならず、土地を手放すなどした。さらにカトリックの洗礼を受けた結果、これまでの慣習であった多妻について妾を囲っているとして糾弾され、さらに威信の源の一つであった配下の隷属民の解放を求められ、これらめぐる裁判に多額を費やしたうえに罪に処せられ、罰金刑を科されて財産を没収され、あるいは刑に服すなどした (Licuanan and Llavador, 4: 243-244, 253-254; BR 5: 188-191; モルガ、397頁)。その結果、スライマンやラカンドウーラの子孫や有力者の多くは、マニラを離れて北方のブラカンやパンパンガに移転した。

この間、1582年6月15日には、トンドおよびマイシロ地区の首長層が、ドミニコ会士でマニラ初代司教であったドミンゴ・デ・サラサールに対して、ゴンサロ・ロンキリョ・デ・ペニャロサ総督（在任1580-83年）の下で任命された16名のアルカルデ・マヨル（司法権をもつ地方行政官僚、後の州知事; BR 5: 84-87）による苛斂誅求の是正を求めてフェリーペ二世に取り次ぐよう要請した。これらは、トンドの有力者ルイス・アマニカラウ、ナマヤン（現サンタ・アナ）首長ラジャ・カラマインの息子マルティン・パガ、ラジャ・スライマンの養子ガブリエル・トゥアンバカル、フアン・バウタガッド、フランシスカ・サイガンおよびマイシロ首長サラリラ、カラウ、ブラカン地方カタガン（ポーロ）首長アマルラガギであった。これらの首長は、女性のフランシスカ・サイガン⁸⁾を除いて、後の「トンドの謀議」に主導的な役割を果たした (BR

5: 188-191)。これらの首長層の不満は、遠くはタヤバス（現ケソン州）のマウバンからももたらされた（Licuanan and Llavador, 3: 373-374）。

スペインは、先にも見たように、先スペイン期のダトなどの首長層を温存して貢税や労役等を免除して住民支配の仲介者とした。しかしながら、彼らがこれまで地域社会の指導者として享受した諸権限は、スペイン支配の下で制限され、彼らの配下の住民に対する威信は損なわれた。例えば、スライマンの甥かつ養子に当たるアグスティン・デ・レガスピは、スペイン統治の下でトンド町長とされたが、受洗していたにもかかわらず、その母にイスラームによる葬儀を執り行ったとして、また住民統治に過失があったとして解任されたのみならず、スペイン当局により、1585年に刑に処せられ投獄された（Scott, 1994, pp. 192-193; Santiago, “Houses,” pp. 44, 46-47）。また、アグスティンの妻は、1578年にスペインの人質として連れてこられたブルネイ王のオジかつパンゲラン（王位継承者）であったサラリラの娘であった（BR 4: 182, 199; Santiago, “Houses,” p. 44）が、これ以前に、アグスティンが慣習に則って妻を姻族関係のあるブルネイの王族に求めて渡航したさい、受洗していることを非難され、配偶を拒絶されるという屈辱を味わったことがあった。

アグスティン・デ・レガスピは刑期を終えるや、スペイン人の駆逐とイスラームの復活を目指して密かに活動をはじめた。その当時、サンティアゴ・デ・ベラ総督の下で、フランシスコ・デ・サンデ総督（在任1575-80年）が、1574年11月の中国人海賊の林鳳（Limahong）⁹⁾によるマニラ襲撃を受けて開始したマニラ市の防衛力の強化工事、すなわち、城壁や外濠の設置による要塞化、言い換えると「イントラムロス」化工事が進められていた。実際、マニラ市の要塞化、現代に繋がる「イントラムロス」としての体裁の完成は、ゴメス・ペレス・ダスマリニャス総督（在任1590-93年）の下であったが、アグスティン・デ・レガスピは、それが完了する以前に蜂起する必要を理解していた。

3. 「トンドの謀議」

スペインの「マイニラ」占領に対して、地元の首長層を中心に、スペイン勢力を駆逐しようとする底流は早くから存在していた。そのなかで、1574年11月に中国人海賊、林鳳が中国当局の追捕を逃れ、約70隻、兵員4,000人からなる大艦隊を率いてマニラ湾にやってきた。林鳳は、スペインの軍団司令官であったマルティン・デ・ゴイティを殺害した。この混乱のなかで、スライマンの息子であったラジャ・バゴおよびその従兄弟の2人の青年が、混乱に乗じてブルネイと協力あるいは林鳳に食糧供給などで協力したとの廉で、スペイン当局によって拘束され処刑された (Santiago, “Houses,” p. 43)。地元の首長らは、ラジャ・バゴの処刑も絡んで、林鳳の襲来をスペインの頸城から脱する好機と捉え、林鳳との連携を試み、船を焼払い、スペインに対して食糧供給を抑制するなどした。この間、各地で地元首長を巻き込んで混乱が起こった (BR 4: 35-36)。その結果、アウグスティヌス会のミンドロ島バゴおよびナウハンのミッションは放棄された (Sitoy, pp. 217-218)。しかしながら、林鳳が突如としてマニラからパンガシナンに撤退したため、蜂起の企ても沙汰止みになる一方、ラカンドゥーラは最終的には彼らに対する貢税や労役の免除と引き換えに林鳳の追捕に協力した (ゴンサーレス・デ・メンドーサ、260-274頁; Santiago, “Houses,” p. 50; Manuel, pp. 297-299)。

林鳳が去った後、マニラの秩序回復にはアウグスティヌス会のヘロニモ・マリンの力に依るところがあった。マリンは、マニラの北方、ブラカン地方ポーロに移動していたラカンドゥーラやスライマンの敵意を宥めた (Sitoy, pp. 218-219)。しかし、スペイン人によるスライマンの息子ラジャ・バゴの殺害を含めて非常に近い一族が犠牲になったこともあり、彼らの怒りを鎮めるのは容易ではなかった。ラカンドゥーラの影響力を恐れるスペイン当局は、林鳳の退却後、ラカンドゥーラをパンガシナンのピナラトガン (現サン・カルロス) に蟄居させた (Santiago, “Houses,” p. 50)。

そのなかで1588年にスペイン当局に発覚した「トンドの謀議」は、先スベ

ン期の首長層を中心にスペイン勢力をマニラから駆逐しようとした壮大な計画であった¹⁰⁾。

アグスティン・デ・レガスピのスペイン人駆逐計画は、1587年7月頃の平戸からの日本船の来航によって急速に具体化した。日本船の船主は、肥前平戸の松浦鎮信（1549-1614年）の下にあった日本人キリシタンのジョアン・ガヨであり、日本のイエズス会からマニラの上長アントニオ・セデーニョに宛てた書簡を携え、また貿易関係の確立を希求した。ガブリエルと名乗る日本人も乗船し、航海中にガブリエルの感化を受けた日本人8名は、マニラにおいてサラサール司教により受洗し、ベラ総督を初めとしてスペイン人高官が洗礼親になった。ガヨはベラ総督に対して中国や周辺諸地域への遠征に必要とあれば6,000名の傭兵を提供できる用意があると申し出たが、ベラ総督は、中国征服に意欲を燃やした前任のサンデ総督やロンキリョ総督とは異なって、フィリピン統治の充実を優先し中国人商人との友好関係を重視していた（BR 6: 308-310）。ガヨはマニラで失意の日々を過ごしたが、間もなく、日本人のディオニシオ・フェルナンデスの仲介によりスライマンの甥かつ養子のアグスティン・デ・レガスピを知ったのである。

アグスティン宅に集まったのは、兄弟のヘロニモ・バシ、ラカンドウーラの息子のマガット・サラマツ、1582年のサラサール司教に対する請願に加わったマイシロの首長フェリーペ・サラリラ、その息子アグスティン・マヌギットであった。この計画の背後には、ピナラトガンに蟄居させられたラカンドウーラの希望があったともいわれている（Manuel, pp. 304-309）。

スペイン人駆逐計画の概要は以下のものであった。まず、アグスティン・デ・レガスピの家で行われたガヨとの予備交渉で、ガヨが日本で必要な兵員（武士）や武器を調達したうえで商人を装ってマニラに戻り、これらの有力者と連携してスペイン人を殺害する。事がなつた暁には、アグスティンを「ラジャ」として戴くとともに、ガヨを宗主として住民から徴収した貢税の一部を上納することとされた。両者間で、卵を割って一約束不履行の場合は、卵のように破壊される一誓約するという伝統的な方式に則って契約が交わされた。さ

らにガヨはアグスティンに数丁の日本製火縄銃や数振の刀を与え、また後の連携攻撃にあたって敵味方の目印とするため、多数の家紋入りの盾を手渡した。

ガヨが去った後、アグスティン・デ・レガスピは、さらに駆逐計画の参加者増大に着手した。ナボタスの首長アマグヒコンは、1571年のスペインの軍団指令官マルティン・デ・ゴイティのマニラ襲撃に対する怨恨を忘れてはいなかった。さらにアグスティンは、1582年にサラサル司教に請願を行ったナマヤン首長のラジャ・カラマインの息子のマルティン・パガを引き入れた。パガはアグスティンの従兄弟で、かつトンド町長としてアグスティンの後継者で、フランシスコ会の記録で「ドン・マルティン」と言及される人物であったが、姦通の罪を犯したとしてスペイン当局によって海岸沿いのタンボボンに追放された。彼らは、さらにスペイン支配の下で刑に処せられるなどしてスペイン支配に不満をもつ有力者を引き入れた。アグスティンの兄弟で82年の請願に加わったガブリエル・トアンバカルおよびトアンバカルの息子フランシスコ・アクタ、トンドの貴族層（マハルリカ [maharlica]）であったピトン・ガタンである。

マルティン・パガはアグスティン・デ・レガスピと語らってタンボボンの居宅にマニラ市周辺の他の首長層を招いてスペイン人駆逐計画を示した。その結果、マガット・サラマットの兄弟、すなわちラカンドウーラの息子のバンパンガ地方カンダバ首長ディオニシオ・カブロン¹¹⁾やブラカン地方ポーロ首長フェリーペ・サロンガも加わった。またトンドのルイス・アマニカラウおよび息子のカラウ、パンダカン首長ペドロ・バリギット、フェリーペ・アマララギである。

しかし、この蜂起計画は水泡に帰した。スペイン人のエンコミエンダの管理を任されていたアントニオ・スラバオは「トンドの謀議」への参加を求められたが、その計画をスペイン当局に漏らした。そのため、スルー王国や姻戚関係にあったブルネイのスルタンらの協力を得るために使者にたったマガット・サラマット、アグスティン・マスギットやファン・バナルは、88年11月に途上のカラミアン諸島で捕縛された。彼らはマニラに護送され、裁判を経て財産剥

奪のうえ、アグスティン・デ・レガスピ、マルティン・パガ、フェリーペ・サラリラ、マガット・サラマット、日本人ディオニシオ・フェルナンデスら7名は死刑、他の者も財産刑および流刑に処せられた。例えば、処刑されたアグスティンを除いたラカンドウーラの息子2人はそれぞれ財産刑を科せられたうえ、ディオニシオ・カブロンは4年間、フェリーペ・サロンガは6年間のメキシコ流刑に処せられた (*BR* 7: 104–111; Manuel, pp. 306–307)。ディオニシオは刑期を終えた後、トンドに居住し、スペイン当局と協力関係を築くことになった (Santiago, “Houses,” p. 52)。

4. 「トンドの謀議」その後

「トンドの謀議」は、スペインの植民地支配の要、マニラ市の設置後、制圧・懐柔したはずの先スペイン期の系譜に連なるダトなどの首長層によって計画され、ブルネイ王国や日本人をも巻き込んだ、きわめて大規模なものであった。スペイン総督府は、「トンドの謀議」後、スペイン統治の協力者であるべきこれらの首長の処遇を真剣に検討する必要に迫られた。

スペイン国王フェリーペ二世は、1594年6月11日付けで、これらの首長層、すなわち、プリンシパリアーアがカトリシズムを受容したことによって、彼らの伝統的な権威やこれまで享受してきた現世的利益が損なわれないよう配慮するよう命じている。すなわち、彼らがスペイン支配を受容し、かつこれに忠実であるように処遇して、配下の住民の統治を委ね、スペインの課す貢税の納入に差し支えない限り、これらの住民から貢納や労働奉仕を受けることを認めるよう命じた (*Recopilación*, 6–7–16)。

司法行政院の審議官であったアントニオ・デ・モルガは、フィリピン諸島の住民が、先スペイン期のダトが「専制的な方法で権力を行使していた」ことによって「奴隷状態」におかれていたが、スペイン統治の下で「奴隷状態から解放された」ため、住民の「受けた利益は少なからぬものがあつた」と、スペインの植民地支配を正当化する一方で、上記の勅令の趣旨による、これらの首長

層と諸島住民との関係について具体的に次のように述べている。

バランガイの支配者及び所有者に対してはそのように「勅令で命じるように」されている。つまりあるバランガイに属するものは、その所有者の支配下にあり、所有者が稲の刈り入れをする時は一日その手伝いをするようになっており、彼が家を新築したり改築したりする場合も同様である。さらにこのバランガイの首長にはその一党の者たちから貢税を集め、それをエンコメンデロに払う役割を持っている（モルガ、371頁）。

スペインは、ここに至ってバランガイ（プエブロ）の首長層、すなわちプリンシパリアーアに対して、かつての権威を認めて優遇することで逆説的にスペインの支配を認めさせ、それと引換えに彼らに集中してスペイン支配の恩恵を与え、スペイン支配の協力者とする方針を明確にしたのである。彼らは、また貢税や強制労働が免除され、ドン（Don）やドニャ（Doña）の称号が許された（Cushner and Larkin, p. 108）。また彼らは統治の正統性原理をなすカトリックの年中行事で中心的役割が与えられ、カトリック信仰の維持に協力することで、プエブロ住民に対する威信を高めた。それゆえ、彼らは率先して教会や修道会に寄附し、土地を寄進して教会組織の維持に貢献した。修道会に寄進すれば、カトリシズムを支配の正統性原理とするスペイン統治の下で、その土地は世俗権力による没収の対象とならないばかりか、スペイン当局への納税の義務から逃れることもできた（Cushner, 1976, pp. 23-36）。

さらに、限定的であったが、1620年代から1711年までの間にマニラ周辺諸州のラグーナ、パンパンガ、パンガシナン、バラヤン各地方の合計10名の首長層がスペイン国王の代理である総督により王領地の下賜を受け、またエンコミエンダを与えられた。さらに軍事的貢献をすることにより軍団司令官（マエストレ・デ・カンポ）などの軍隊の階級が与えられる場合もあった（Santiago, “Encomenderos”）。

この典型が、パンパンガ地方の首長たちやプエブロの住民に対して、1585年から1602年までの間になされた71件の王領地の下賜である。パンパンガ地方は、スペインによる「マイニラ」の占拠、すなわちマニラ市の設置後にトンド

の首長であったラカンドゥーラらの一族が移り住んだ土地である。先に見たように「トンドの謀議」に加わりメキシコ流刑となったディオニシオ・カプロンはパンパンガ地方カンダバの首長であった。

王領地の下賜がパンパンガの首長層に最初になされた1585年は、まさにファン・デ・マニラらによる蜂起がなされた年である。なかでも「トンドの謀議」発覚後に総督に就任したゴメス・ペレス・ダスマリニャス（在任1590-93年）は、52件に上る王領地の下賜を実施した（Cushner and Larkin, pp. 106-107）。パンパンガ地方は、19世紀末葉に至るまで、マニラの穀倉であったと同時に一貫してスペイン支配を維持するに不可欠な兵員の供給地であり、マニラ市の防衛や住民反乱の鎮圧を担った。

パンパンガ地方の首長たちは、「トンドの謀議」後、明確にスペイン支配の協力者となり、自ら武功をたてることで軍団司令官などのポストを得て、先スペイン期のバランガイ社会における統率者としてのダトの役割を継承した。さらに、彼らは配下の住民への支配を維持しつつ王領地の下賜によって、従来の共同体による土地保有の慣行を脱して農業開発を行い、増大する米需要に対応し、その過程で経済基盤を拡大しながら住民に対する権威と支配を強化して一層動員力を高めたと考えられる。

そのため、彼らの軍事的かつ農業的貢献が正当に評価されず、スペインが取奪を強化したと認識されたさい、マエストレ・デ・カンポに任じられていたパンパンガのフランシスコ・マニアゴは1660年10月に蜂起してルバオ、バコロールを占拠しパンパンガ河口を封鎖してマニラとの交通を遮断した。マニアゴの蜂起に呼応して12月に北に隣接するパンガシナンではマエストレ・デ・カンポのアンドレス・マロンが聖職者を除くスペイン人の駆逐を目指して蜂起した（Cortes, pp. 145-168）。マンリケ・デ・ララ総督（在任1653-63年）は平定軍を差し向けるとともに、ラカンドゥーラの曾孫でパンパンガ州アラヤット首長であったファン・マカパガルを、直ちにこれまでの軍事的功績を踏まえてマエストレ・デ・カンポに任じ、一族の貢税や労役を免除して反乱鎮圧の協力者とし、これを仲介者としてマニアゴの要求に譲歩して労役に対する賃金の

支払いや恩赦等を受容して和平を結んだ。マカパガルは勇躍して、マンリケ・デ・ララ総督の要請に応じてマロンの蜂起の鎮圧に多大な功績を示し、総督は、1667年にマカパガルにエンコミエンダを与えて、その労に報いたのである（Santiago, “Encomenderos,” pp. 173–178）。その結果、さらにスペイン当局とパンバンガの首長は連携を深めることになった。1762–64年のイギリスのマニラ占領にあたって、シモン・デ・アンダ・イ・サラサル総督（在任1762–64、70–76年）が、パンバンガにスペイン総督府を移転してイギリスに抵抗したのには理由があったのである。

5. おわりに

スペインは、17世紀初頭までの比較的短期間にミンダナオ島やスールー諸島、内陸高地部を除いて、少数のスペイン人によって、首府マニラを中心にルソン島やビサヤ地方の沿岸低地部に領域的支配を及ぼし、スペイン領フィリピンの外縁を確保することができた。スペイン領マニラの確立も比較的容易であった。1571年5月のマイニラの陥落後、6月24日にはスペイン植民都市マニラ市が設置されたのである。それを根拠地として、ルソン島沿岸部に部隊が派遣され、少人数のスペイン人部隊と諸島住民の混成軍によって低地部がスペイン支配におちた。

しかし、マニラ周辺諸地域を中心とする先スペイン期のダトの系譜を引く首長層を中心として、スペイン支配に対する不満は根強かった。それがスペイン植民都市マニラの設置から15年以上を経て「トンドの謀議」として具体化していったのである。カトリシズムを基底に据えたスペインの植民地統治が深化していくにつれて、これらの首長層は共通の問題を意識させられ、逆に彼らの政治的結合を深め、そのネットワークを活性化させたともいえよう。しかし、その計画は潰え、スペイン総督府は「トンドの謀議」の首謀者を処刑するだけでなく、彼らの財産を没収して総督府財産に繰り入れ、さらに多数の関係者をメキシコやその他の遠隔地への流刑に処した。

その結果、マニラ市を取り囲むトンド州は、スペイン支配に抵抗しうる有力な政治指導者もそれを支える財力も失うことになった。一方、スペイン総督府が首謀者を処刑するだけでなく、関係者全てに財産刑を科し、また流刑に処したことは、「トンドの謀議」に関与した指導者の広範な影響力をいかに認識していたかを示しているともいえる。

また、「トンドの謀議」が潰えた結果、スペイン領フィリピン社会は、ブルネイを初めとするイスラーム化した周辺諸地域と切り離され、カトリシズムを基底に据えたスペインの世界秩序に取り込まれていった。スペインのフィリピン統治では、先スペイン期の首長層を温存して、プエブロの町長・町役人などとして、スペインの植民地統治の末端を担わせたことから、社会構造における先スペイン期との連続性が指摘される。しかし、マニラ市周辺地域の首長層においては、「トンドの謀議」で有力な首長層が一掃されたことから一定の勢力交代がみられたと考えられる。

その一方、「トンドの謀議」の後、スペイン総督府は、これら首長層の処遇を考慮し、これらと共生関係を築く方向をとった。スペイン来航時のラカンドゥーラの一族を初めとして、マイニラ周辺の有力者らが多数移住したパンパンガ地方は「トンドの謀議」後は、スペイン総督府と協力関係を築いてスペイン支配を支える兵員と食糧の拠出地として重要な位置を占めることとなった。これは、先スペイン期の系譜を引く首長層の生存戦略の一つであったとも判断できよう。

すなわち、マイニラを放逐された首長層が、さらに「トンドの謀議」により政治的権威を失墜させられ経済力を奪われた結果、彼らの生存戦略として、スペインとの絶えざる相互交渉のなかで、彼らの住民に対する権威と自立性を再確立し、スペイン統治体制に適応した結果であったと考えられる。その意味でもスペイン領フィリピンは17世紀初頭までに成立したといえよう。それにより、カトリシズムの布教と一体となった植民地都市マニラを中心とするスペイン支配が深化し、フィリピン諸島住民は、南部のイスラーム地域や内陸高地部を除いて、スペイン領フィリピンに囲い込まれることになった。さらにカトリ

シズムの普及はスペイン領フィリピンの人々を繋ぐと同時に、各地方が実際の布教を担当した各修道会による司牧の下におかれた結果、独自の地域性を獲得するにつれて、それに応じた言語集団別の地方意識も強化する機能を果たしたのである（池端、281-284頁）。

註

- 1) 初期のスペインのフィリピン支配については、Cushner, 1971年による。また、本稿の記述の一部は下記の拙稿に重なるところがある。
- 2) マニラ・ガレオン貿易については、Schurzによる。また、福建-マニラ間貿易の規模などについては、Chaunu, pp. 164-169, pp. 200-216を参照のこと。
- 3) マヌエルによれば、ラカンドゥーラの生没年は、1503年12月16日-89年3月21日である（Manuel, p. 239）。
- 4) 1511年にマレー半島のムラカ（マラッカ）がポルトガルに占領され、その王家が南方のジョホールに移ったことを契機として、多数のムスリムが東南アジア各地に移動することにより、各地のイスラーム化が進んだ。その歴史的文脈において、ジョホールからカプンスアンが渡来し、マギンダナオのイスラーム化が進む契機となったと考えられる（早瀬、41-45頁）。ブルネイ王国の歴史については、ムハンマド・ジャミル・アル・スフリを参照のこと。
- 5) マヌエルによれば、洗礼名がカルロスであったのは、アチェ（ラジャ・マタンダ）であり、ラカンドゥーラの洗礼名はフェルナンドであった。両者とも1521年のマゼランの来航時にセブで洗礼を受けた一人である。マヌエルは、ラカンドゥーラが自身の遺言でフェルナンドと言及していると述べている（Manuel, pp. 258, 309）。
- 6) スペインによるフィリピンの植民地化について、一般に、比較的少人数の遠征部隊でフィリピン諸島沿岸部が「征服・平定」されたとされるが、近年、フィリピン諸島人を含む東南アジア世界における「戦争」や「降服」に対する観念・意味がスペイン（ヨーロッパ）と異なっていたことが指摘されている。

東南アジアの小人口世界にあっては、労働力となる人口の把握が重要であり、より有力な首長は、より多くの配下を獲得することに価値を見いだしていた。そのため、戦闘における人員の消耗を極力避け、相手の勢威・武力が優っていると判断される場合は、人員を温存するために逃散することも一つの戦略であり、必ずしも決定的な敗北や降服とは認識されなかった。そのため、首長間の関係調整のための血盟を含む儀式が執り行われたが、

- 首長の逃散を降服とみたスペインの認識と齟齬が生じた。すなわち、スペインの比較的容易な「征服」は、諸島住民の犠牲を避ける戦略と相まって現出したといえる（Angelesを参照のこと）。
- 7) ムスリム（イスラム教徒）であったと思われる。またマカベベに近いルバオやベティスでは1572年に至ってもスペインに抵抗していた（Larkin, pp. 19-20）。
- 8) 「フランシスカ」は「フランシスコ」の誤りの可能性もある。そのさいは、女性でなく男性となる。
- 9) 林鳳は、広東潮州府饒平人で海上活動に従事していた。明の討伐軍により澎湖諸島に拠点を選し、70隻の艦隊3,000人の兵員を率いてマニラに来襲し、軍団司令官のデ・ゴイティらを殺害したがファン・デ・サルセド（1549-76年、初代総督レガスピの孫）らの抗戦で退却した（1574年11月29日-12月2日）。林鳳は、マニラ北方のパンガシナンのアグノ河口に砦を築いた後、サルセド軍の包囲網を破って37隻で脱出した（75年8月4日）。林鳳の襲来は、明の追討軍総統の王望高のマニラ来航とアウグスティヌス会士のM. デ・ラーダの福建訪問の契機となった（ゴンサーレス・デ・メンドーサ、第2部第1巻）。
- 10) 以下の「トンドの謀議」にかかる記述は、BR 7: 95-111およびLicuanan and Llavador, 4: 529-537, 545による。
- 11) カブロンについては、Manuel, pp. 234-235を参照のこと。

参考文献

- 池端雪浦「聖ヨセフ兄弟会とタガログ社会」『歴史のなかの地域』シリーズ世界史への問い 8、岩波書店、1990年、279-308頁所収。
- 菅谷成子「スペイン領フィリピンの成立」石井米雄編『東南アジア近世の成立』岩波講座東南アジア史3、岩波書店、2001年、121-148頁所収。
- 早瀬晋三『海域イスラーム社会の歴史—ミンダナオ・エスノヒストリー』岩波書店、2003年。
- ゴンサーレス・デ・メンドーサ『シナ大王国誌』長南実、矢沢利彦訳、大航海時代叢書6、岩波書店、1965年。
- アントニオ・ピガフェッタ「マガリャンイス最初の世界一周航海」長南実訳・増田義郎注『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン 航海の記録』大航海時代叢書1、岩波書店、1965年。
- ムハンマド・ジャミル・アル・スフリ『ブルネイの古代史—古代とイスラム教の発展』鷲見正訳、日本ブルネイ友好協会、1995年。
- アントニオ・デ・モルガ『フィリピン諸島誌』神吉敬三、箭内健次訳、大航海時代叢書7、

岩波書店、1966年。

- Angeles, Jose Amiel. "The Battle of Mactan and the Indigenous Discourse on War." *Philippine Studies* 55(1): 3–52.
- Blair, Emma H. and James Alexander Robertson, eds. *The Philippine Islands, 1493–1898*. 55 vols. Cleveland: Arthur H. Clark, 1903–1909.
- Chaunu, Pierre. *Les Philippines et le Pacifique des Ibériques (XVI^e, XVII^e, XVIII^e. siècles) –Introduction méthodologiques et indices d'activité*. Paris: S.E.V.P.E.N., 1960.
- Cortes, Rosario Mendoza. *Pangasinan, 1572–1800*. Quezon City: University of the Philippines Press, 1974.
- Cushman, Nicholas P. *Spain in the Philippines from Conquest to Revolution*. IPC Monographs, no.1. Quezon City: Ateneo de Manila University, 1971.
- Cushman, Nicholas P. *Landed Estates in the Colonial Philippines*. Monograph Series, no. 20. New Haven, Conn.: Yale University Southeast Asian Studies, 1976.
- Cushman, Nicholas P. and Helen Tubanguí, eds. *Cedulario de Manila: A Collection of Laws Emanating from Spain Which Governed the City of Manila 1754–1832*. Manila: National Archives, 1971.
- Cushman, Nicholas P. and John A. Larkin. "Royal Land Grants in the Colonial Philippines (1571–1626): Implications for the Formation of a Social Elite." *Philippine Studies* 26(1978): 102–111.
- Larkin, John A. *The Pampangans: Colonial Society in a Philippine Province*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1972; reprint ed., Quezon City: New Day Publishers, 1993.
- Licuanan, Virginia Benitez and Jose Llavador Mira, eds. *The Philippines under Spain: A Compilation and Translation of Original Spanish Documents*. 6 Books. National Trust for Historic and Cultural Preservation of the Philippines, 1990–96.
- Majul, Cesar A. *Muslims in the Philippines*. Quezon City: University of the Philippines Press, 1973.
- Manuel, E. Arcenio and Magdalena Avenir Manuel. *Dictionary of Philippine Biography*. Vol. 4. Quezon City: Filipiniana Publications, 1994.
- Medina, Isagani R. "Beyond Intramuros: the Beginnings of Extramuros de Manila to the 19th Century-A Historical Overview." In *Manila: Selected Papers of the Annual Conference of the Manila Studies Association 1989–1993*, ed. Bernardita Reyes Churchill, pp. 50–67. Manila: Manila Studies Association, Philippine National Historical Society, National Commission for Culture and the Arts, 1994.
- Noone, Martin J. *General History of the Philippines*. Part 1, Vol. 1: *The Discovery and Conquest of the Philippines (1521–1581)*. Manila: Historical Conservation Society, 1986.
- Recopilación de leyes de los reyes de las Indias*. 4 vols. 2nd. ed. Madrid, 1756. (法令はlibro-titlo-

leyの順に数字で示す)。

- Sánchez Gómez, Luis Angel. “Las principales indígenas y la administración española en Filipinas.” Ph.D. dissertation. Universidad de Complutense de Madrid, 1989.
- Santiago, Luciano P. R. “The Houses of Lakandula, Matandá and Solimán (1571 – 1898).” *Philippine Quarterly of Culture and Society* 18 (March 1990): 39 – 73.
- Santiago, Luciano P. R. “The Filipino Indios Encomenderos (ca. 1620 – 1711).” *Philippine Quarterly of Culture and Society* 18 (September 1990): 162 – 184.
- Schurz, William Lytle. *The Manila Galleon*. New York: Dutton, 1939; rpt. ed., Everyman Paperback, 1959; Manila: Historical Conservation Society, 1985.
- Scott, William Henry. “Isabelo de los Reyes, Father of Philippine Folklore.” In *Cracks in the Parchment Curtain and Other Essays in Philippine History*, pp. 245 – 265. Quezon City: New Day Publishers, 1982.
- Scott, William Henry. *Barangay: Sixteenth-Century Philippine Culture and Society*. Quezon City: Ateneo de Manila UP, 1994.
- Sitoy, T. Valentino Jr. *A History of Christianity in the Philippines*. Vol. 1: *The Initial Encounter*. Quezon City: New Day Publishers, 1985.